

## 随 想

## 日本菌学会史— 2

1967年から IMC3 (1983年) まで

椿 啓 介

前回に引きつづき、日本菌学会創立十周年を終わった1967年から第3回国際菌学会議 (IMC3, 1983) に至るまでの日本菌学会の歴史を振り返ってみる。

十周年の鳥取大会も盛大裡に終わった。いま、手元に当時の学会費納入の払込票がある。それを見てみると、十周年の当時は年会費1,200円の頃のことであった。毎年の大会と採集会は順調に進んでいる。42年度の11回大会 (1967) は東京教育大学理学部で開催され、参加者は200名、43年度の12回大会 (1968) は京都大学の楽友会館で開催され、参加者は150名で、記録によれば当時の会員数は598名とある。学会が出発したころは、会員のあいだで500名ぐらいの会員になれば良いが何時のことかな、などと話し合ったことを考えると、予想以上の会員数の伸びである。当初は数少ない菌類の研究者とキノコ愛好者との集まりであって、周囲からは同好会的な色彩が強いと思われがちであったが、次第に菌学会の存在が知れわたり、自然界における菌類の役割にたいする認識もじょじょに強まってきたのであろう。また、急速に発展してきた応用微生物工業における菌類の立場も強まってきた時代も反映して、会員数も増えてきたが、学会役員会でもこの傾向にどうゆう対応をしたら良いか常に議論されていた。菌学者のみならず、関連諸学会からの参加も増加してきているし、将来どのような活動をしたら良いか、期待に沿うにはどんな方向に向いたら良いか、など話し合ったものである。学会の顔は学会誌である。さいわいに目標とする英文の原著論文は着々と増えてきているが、和文によるニュース的な内容のものも多く、国際的な学会誌とするにはいまだ道遠い状態であった。現在の Mycoscience の刊行を考えると隔日の思いがある。当時の日本における菌学の普及や学会の維持を考えると、英文論文だけの雑誌でも問題はあっただろう。その原著論文でも、当時の会報に“原稿がたりない。至急お送りください”という編集委員長の悲痛な叫びも載っているような有様であった。学会という組織の維持と運営をあまり得意としない学者の集まりではあったが、毎年の大会と採集会は年を追って盛会となってきた。大会

は、京大にひきつづき北大、国立科博、東京家政大にと開催されて16回大会は昭和46 (1971) に広島大で開かれ、250名の参加者が集まるにいたった。実は、この年は日本菌学会にとって非常におおきな出来事のあった年でもあった。それはこの1971年、イギリスのエグゼターで第一回国際菌学会議 (IMC1) が開催されたのである。この会議の母体は、いまでは日本でもおなじみとなっている国際菌学連合 (International Mycological Association; 通称 IMA) である。この組織は、当時ややもすると菌学が後回しにされがちであった国際的な微生物学の組織から、菌学を中心にして独立したものを作ろうとして出来上がった新たな国際的な組織であった。菌学にとって大発展の年であって、世界中の菌学者が一堂に会い集う最初の国際会議がこの組織設立をはかったイギリスの地で開かれたのである。そこで決まった役員をみると、President: C. J. Alexopoulos, Secretary: C. Booth, Treasurer: J. A. von Arx という懐かしい名前がならんでいる。会議には、当時の日本の渡航事情もあって10名ほどの菌学会員の参加であったが、Vice President として R. Heim, C. V. Subramanian, A. Pilát とともに日本から小林義雄先生が指名され、日本の菌学が着実な発展をとげていることが認められたわけで学会のおおきな喜びであった。その後、Executive Committee の一員として椿が指名され、下働きのお手伝いをするようになった。日本菌学会にとって世界が近くなった記念すべき年と考えている。なお、菌学会報もこの12巻 (1971) から念願の年4回の刊行をするに至った。

この年、また耳寄りの情報はいった。昭和49 (1974) 年に国際微生物連合会議 (IAMS の部会) が東京で開催されるとのことである。このことは後で触れるが、菌学会でも積極的に対応する姿勢がだされた。

大会はその後も年毎に盛大となって東京家政大 (昭48)、北大 (昭49) とつながり、採集会も千葉県清澄山、神奈川県丹沢山、北海道、富士山などと日本全国をまたにかけて活発におこなわれたが、次第にフォーレ参加者が増えて100名を越すくらいになると今度は受け入れ態

勢が大変となってきた嬉しい悲鳴をあげる始末であった。この頃から採集会の在り方にも問題が生じてきた。菌類採集会は他の学会から指摘されるように、学会の会則にも盛られている誠にユニークな菌学会ならではの行事であって万人に解放されている楽しいものであるが、実のところ問題も多い。大勢集まって歩きながらキノコの採集、ルーペ片手にしゃがみこんで微小菌類をさがすもの、毎度の鑑定者の先生方の苦勞、その結果に何が残ったか、採集品の始末、顕微鏡使用をとまなうカビ研究者の言い分、しかも全員が成果を期待する、などの問題もでてきて採集会検討委員会もできたが、この対策は現在でもあまり解決されていない。外国の採集会に参加してみても痛感するのだが、その在り方はむしろ参加者の菌類採集にたいする姿勢にあるような気もする。それにしても採集会を引き受けた担当者の苦勞は大変なものがある。

昭和49(1974)には面白い行事をすることになる。それは前期の IAMS の東京帝国ホテル開催にもなって日本菌学会特別シンポジウム (Pre-IAMS Mycology Symposium) を熱海市、新熱海ホテルで開くことであった。これは、知名の外国菌学者がせっかく IAMS 参加で来日するのだから、此の際に菌学会でも集会をもって交流をはかろうというのが主な目的であった。実のところは、どうもいずれは国際菌学会議をひきうけるハメになりそうだから、この機会をつかって外人菌学者との場に慣れておこうというも陰の目的でもあった。当時の印東会長を中心にシンポジウムと富士山麓採集会の案を練り、IAMS 招待参加者の中から4名をえらんで前以て出席の交渉をしたところ全員の快諾を得た。来日した外人参加者は E. G. Jones (英)、R. J. Bandoni (カナダ)、J. W. Fell (米) の3名(米国の Wm. B. Cooke 氏は参加予定であったが急病のため来日できず)、それに韓国の崔泰周氏も加わって6演題について熱心な討議が気楽なふん意気のなかで終日おこなわれた8月29日だった。参加者は約30名でリラックスした懇親会も以外と外人に好評のようであった。翌日は富士山船津口登山道で採集会。この集まりは外人に強い印象を与えたようで、今年の IMC5 (バンクーバー) で、久々に前期の Fell 博士にあったが、彼は冒頭に“熱海と富士山はすばらしかったので忘れられない”と語っていたぐらいである。外人にとって富士山は我々の想像以上の魅力があるようで、此の点はその後の IMC3 で如実にあらわれていた。実のところ熱海は彼らに楽しかったわけがある。熱海では外人だけ別のホテルに泊めたのだが、案内した別れ際に、決して熱海の繁華街にふらふら出歩かないこと、と念をおしたところ、よく解ったとの返事。ところが、なんと私

がホテルを去った直後、早速3名で街にくりだし、どこかのバーで美人にかこまれてビールを飲みながらワイワイとにぎやかにやり、実にたのしかった、と翌日はケロっとしている始末。とにかく明るい人達であった。その Jones 教授は英国菌学会長もやり今や海生菌類の大立者である。Bandoni 教授はいうまでもなく異担子菌類の権威で IMC5 (バンクーバー) では President をつとめた。Fell 教授は担子菌系酵母のみならず酵母全体の大御所である。まことに立派な学者に来てもらったわけである。小さなシンポジウムではあったが、小人数なので日本側は大いに勉強になったし、その後の IMC3 開催において役にたったことが多かったのである。

熱海シンポジウムも無事に終わって、昭和50年(1975)大会は九大で開かれ霧島山麓で採集会もおこなわれた。翌昭和51年は創立20周年にあたる。記念大会は東京の半蔵門会館でシンポジウム2つをとまなう開催、参加者は250名を上回り、20周年記念号(604頁)も刊行した。よくここまで来たものだという会員同志の言葉が印象にのこった日であった。ついで翌年の大会は岡山大で開かれたが、この年から会長や幹事の手弁当でやってきた学会事務も研究者の手に余るようになったので日本学会事務センターに委嘱することになった。学会の態勢の強化である。一方、採集会も妙高山麓(昭51)、八幡平(昭52)、宮崎(昭53)、裏磐梯(昭54)、山中温泉(昭55)、富士山麓(昭56、57)、長野県白田(昭58)へと続き、毎度多数の参加者がある盛会ぶりであった。この毎年開かれる採集会は大会とともに菌学会の目玉ともなり、学会 PR と会員獲得におおきな成果をもたらしている。

昭和52年(1977)、菌学会にはまたも大きな転機がおとずれた。米国、タンパ市の南フロリダ大学で IMC2 が開催されたことがそれである。こんどは日本の事情もよくなっていたので若手菌学者を含む30数名の会員が参加した。熱帯の強い日差しと毎日の驟雨のもと、広大なキャンパスで第2回国際菌学会議は盛大に開かれたが、諸シンポジウムの内容とはまた別に、日本側の目は会期中にある IMA 総会に注がれていた。そこで次回の開催地が討議されるのである。講堂のような大きい部屋で開かれたその総会には、各国の代表ばかりでなく関心の深い者たちが一杯で、議事も進行してやがて次回 IMC3 の候補地に関する議題にうつった。すると立ちあがったのがインドの代表と称するターバンを巻いたアカデミー会員で、ちょうど次ぎの IMA President がインドの C. V. Subramanian 博士にきまっていたので前以ての話合いがあったような気もしたが、熱心に次回のインド招聘について熱弁をふるったのである。議長のたしか Booth 氏もこの辺で候補地に関する議題を締めくくろう

という気配になったその時、すかさず立ち上がったのが平塚直秀先生であった。前以ての日本側の話し合いはあったのだが“日本で次回を引き受けても宜しい”という発言であった。会場はやや騒然となる。傍らで平塚保之氏が流暢な英語でこれを補佐。するとあるアメリカの学者が、“私の娘が東京にいったがホテルの高額なことを聞くと、とても我々には難しい”との発言がある。また他にも発言があったような気もするが、そのときにやおら立ち上がったのがアメリカの Korf 教授（現在、日本菌学会名誉会員）である。“日本はすでにそんな処ではない。安価なホテルも沢山あるし、問題は全くない、云々”と氏一流の弁舌で日本の立場を援護してくれる。更に援護射撃してくれたのが同じくアメリカの酵母研究者として有名な Phaff 教授である。“日本はきわめて穏やかな親切な国で、全く問題はない”などといってくれる。日本との共同研究で全国の樹液酵母を採集してまわった感想がそこにはあった。平塚保之氏は、“英語の問題にたいする発言があったが、年をとった者には難しいが、いまの日本の若い学者は英語も巧みであり、これも問題はない”と重ねて援護してくれる。反対の議論は全くでてこない。そこで議長も少々困って何人かで相談した結果、ここでの決定を避けていづれ Executive Committee の間の投票で採決すると締めくくった。Korf, Phaff 両氏とも日本菌学者にはごく親しい間柄ではあったが、こんなにも日本のために援護してくれようとは想像もしていなかったことである。いささかの興奮と感謝にくれた総会であった。場外にてみるとインドの学者たちはひっそりと去っていく。気の毒にも思ったが、“俺は実は日本開催に賛成なんだ”という2、3の外人が耳打ちしてくれるので心強かったことを覚えている。

IMC2 も無事おわり、この Executive Committee による vote 用紙がきた。私はもちろん日本に投票、その結果を心待ちにしていたところ、やがてその結果が届く。ある程度の投票数が日本にくるとは思っていたが、開票結果は驚いたことに圧倒的多数で日本開催に向けられていたのである。正式な日本開催の要請状もとどき、ここに IMC3 の日本開催に向けてスタートが切られたのである。

どんな事業にも裏の歴史があるものであるが、IMC3 の日本開催決定までの陰に秘められていた歴史は大凡以上のようなものである。これで一挙に国際菌学会議にむけて出発、ということになる筈であったが、なにしろ日本菌学会にとって始めての大事業であり、しかも今まで国際会議の中心となって活動した菌学者はだれもいない。平塚先生によるアンケートや事情説明によって全会員の強い賛同は得られているが、どんな規模になるか、

開催に要する費用はどのくらいになるか、場所はどこにするか、などまさに暗中模索の状態から始まったのである。いままでは日本の菌学者、なかでも菌類分類学を志す者達が集まった性格の学会であったが、否応無しに国際的な檜舞台に飛び出すことになったのである。国際会議となると今までとは規模はおのずから違ってくる。分類のみならず生態、生理生化学、遺伝、分布、発酵、醸造、物質生産、医真菌、キノコ栽培など、それこそ基礎から応用にいたるすべての分野を網羅した菌類の総合科学といった内容が盛りだくさん。国際的には全世界の菌学者を呼びたいが、菌学には国境はないものの菌学者には国境という厄介なものがある。日本の菌類関係のあらゆる学協会にもできるだけの応援を求めなければならない。肝心の資金面にも慣れない頭を絞らなければならない。それにはまず体制を立てなければならない。そこで平塚直秀準備委員長を決定して準備態勢の基本を確立、開催予定日は1983年8月28日(日)から9月3日(土)ときめ、場所は準備その他の関係から東京とし、手分けしていろいろな会場候補をさぐった結果、一応新宿の京王プラザホテルとなった。平塚委員長のもとに菌学会員の10数名が中心となり、さらに菌学に関係の深い各関連学協会からの協力参加のもとに準備委員会がやっと設立されるにいたったのである。やがて組織委員会も正式にきまり、IMC3 顧問の3先生、諮問委員の21名の先生の快諾もいただき、一番活躍すべき組織委員もきまった。すなわち、組織委員長は平塚直秀、副委員長として長谷川武治、日高 醇、岩田和夫、與良 清、総務幹事長は椿、委員として菌学会員および他の関連学協会からの応援を得て総計53名となった。プログラム委員会は青島清雄委員長ほか25名、会場委員会は倉田 浩委員長ほか4名、財務委員会は飯田 格委員長ほか5名、庶務委員会は椿委員長ほか6名、募金委員会は日高 醇委員長ほか8名。とりまとめの事務は国際会議事務局(株)に委託したが、これだけの関係者がうごくのであるから大変である。こわい者知らずで柄にもなく総務幹事長という苦勞する大役を引き受けてしまった私も、途中では挫折感を覚えたことも何度かあったが、委員諸氏の激励、特にもろもろのことを引き受けていた当時の筑波大の諸氏のはげましと援助のお陰でどうかイギリス本部や諸国の参加者との連絡やら、成田まで行って外人入国の問題の相談やらのこまごまとした面倒な事柄を処理していくことができたのであった。また、IMC2 (タンパ市)で同じく総務幹事長をつとめた友人の Simmons 博士から親切にも国際会議にかんする彼の極秘ノウハウを送ってくれたのも大変に役に立ったものである。

IMC3 の準備は着々と進行していたが、この間、国内

でも学会大会、採集会はますます盛大に行なわれていた。昭53 (1978) には大会を筑波大で引き受けることになり、まだ完全には出来上がっていないキャンパスで約250名があつまった。フロリダで IMC3 の日本開催がきまった翌年のことである。筑波大会では新しいことを試みた。ちょうど Bandoni 氏も私の研究室にいたことだし、すこしでも国際的にしようとして日本の大会の通例であった会長などの胸につけるおおげさなリボンを全廃したのである。しかし、これはこの年限りのようであった。この年、菌学会会員がついに1,075名となり1000人を越える学会となった。また、菌学のますますの必要性を国家に要請するため国立菌学研究所設立計画なるものを以前から作っていたが、この案もこの年は3次案となっている(日菌報19 (2))。残念ながらこの案はいまだに陽の目を浴びていない。次ぎの大会は滋賀県大津で開かれ、参加者300名、翌年(昭55)は広島でひらかれたが、この年は学会として新しい事業もひらいた。6月と11月に東京女子体育大で第一回、二回の菌学会菌学講座がそれぞれである。菌学の啓蒙におおいに役立った事業であった。学会大会は新潟(昭56)、東京農大(昭57)、東京医科歯科大(昭58)と移り、毎回の参加者は250-300名の盛会であったが IMC3 の開催する昭58 (1983) はとうとう目と鼻の先にと迫って来た。私の研究はまったくストップ、すべてが IMC3 へと向かっていた。

実際に活動していた各委員の努力は頂点にたっしている。次々と入る国内外からの連絡やら注文への返答やらと全体総括に忙しい総務、大会開催の肝心な土台である資金面の維持になりふりかまわず都内をかけずりまわる募金委員、次々とまとまったシンポジウムの日程配分に目をこらすプログラム委員、毎日の会場のレイアウトに神経をめぐらす会場委員などの他、開催当日まで忙しい纏め役をつとめる各コンビナーに至るまでの活躍はまことに目覚ましいものがあった。

いよいよ開会の当日、その詳細は日菌報24 (1983) に載っているので省略するが、外人参加者(登録者)は約400、それに国内の登録者や当日参加者を加えて約1,100名にあがった盛会ぶりであった(写真は開会式)。各シンポジウムと平行したポスター会場も熱気をおび、一般口頭発表をポスターに切り替えた成果はいみじくも現れていた。そこでは会議用語が英語というハンデも問題にはならなかった。おかげで数キロの体重が減った私であったが、講義や文献でしか知らなかった著名な外国菌学者と話しあった若い日本菌学者の興奮気味な眼の輝きを見て、矢張りやって良かったと痛感する毎日であった。また、新宿地下街や原宿で財布や上着などの置き忘れをした外人ができて愕然としたこともあったが、すべて安全に保管されてあったという開催者として嬉しい話もあった。

京王プラザホテルの本会議のあと、IMC3 の一環としての菌類採集会が清澄山(32名)、日光(30名)および富士山麓(80名)で開かれ、これで IMC3 の行事は総て無事終了したのであった。ここである挿話がある。富士山麓の富士桜荘に宿泊した外人たちは、早朝、全貌を現した富士山に感嘆の声をあげていたが、そのなかで夫婦で参加していた Webster 博士がマユミの葉についた菌を採集、帰国後に CMI の Sutton 博士にわたした。この菌が翌年に英国菌学会誌に *Septogloeum japonicum* Sutton & Webster (Hyphomyces) として発表されたのである。後にこの菌は青森県でも見つかったが、一步先んじられたとはいえ、これも IMC3 が世界の菌学に貢献した隠された成果のひとつともいえよう。

この国際会議は日本菌学会にとって、単に菌類が好きだという者の集まりから菌類をめぐる菌類科学とでもいいうか、菌類の大きな世界を包含する学術研究者の集まりへと発展したという点でまことに大きな意義のある会議であったと言えよう。1990のレーゲンスブルグ IMC4 (ドイツ)、本1994年のバンクーバー IMC5 (カナダ) も盛会であって、カナダでは61カ国、1,600名の参加者のうちには90余名の日本人があった。両会議でも、前の IMC3 の運営がもっとも立派であったと囁いてくれた外人学者の多かったこともお世辞半分とはいえ嬉しかった。

日本菌学会の歴史を語るのに IMC3 の話題がやや多すぎると言われそうだが、日本国内で固まりができ、それが次第にふくらんで遂に世界に躍り出た記念すべき歴史の一齣であると思うので書きつらねたわけである。曾ては会長も幹事も手弁当で封筒の上書きなどをしてきた、今から思えば対話も多く楽しくもあった頃の努力がやっと実ったのであるから。

我々の菌学会も IMC3 の後、ますます発展してきた。特に最近の汎菌学的な活躍ぶりと国際的な動きには各支部会の活動と相俟って往時を思うと隔世の感がある。将来の新なる発展を望む点からも、学会の歴史を振り返るのも意味があろうと思って創立10周年以後から IMC3 までの歴史を物語り風にたどってみた次第である。

